

宮川スコード代表に聞く

2005年、「世界への挑戦」の道は？

インタビュー 編集部

アジア初の世界選手権も、あと2年余と迫った。JOAを中心とする強化体制も確立しつつある。

その陣頭に立つスコード代表、宮川氏に2005年への展望を語ってもらった。

Q：

JOAでは選手強化特別委員会も立ち上がり、本格的に稼働しはじめましたが、WOC 2005までのプランはどうなっていますか？

A：選手発掘と走力強化です。

プランの実行は、正式には2003年4月開始ということになっていますが、昨年12月から試行が開始されています。今回のプランは大きく分けてまず2本立ての国内選手強化からスタートします。まず初めに、日本陸上競技連盟（以下：陸連）の力を借りて、走力のレベルを国際的な競争力のあるものに引き上げるという事です。日本のオリエンテーリングの競技力は、残念ながら世界のトップと対等に競い合える状況にはありません。

しかし、陸上競技の世界では日本はマラソンを始めとして、中長距離では入賞を狙えるところにあります。オリエンテーリングを走力と技術（ナビゲーション能力）に分け、少なくとも走力に関しては世界レベルのものを揃えようという試みです。そのため、陸上選手や山岳レーサーなど走力のある選手を発掘してオリエンテーリ



WOC 97（ノルウェー）前回優勝国のスイスを追って2走を走る村越。彼を乗り越えることが、日本チームの最初のハードルだ。

ングの技術を教え込もうというのがひとつの柱となります。

一方で、現在のオリエンティアのトップ選手に対しては、走力面で国際的レベルに引き上げようとするため、陸連の指導者の力を借りていこうというのがふたつ目の柱になります。

そして、この二つの試みからピックアップされた選手に対し、海外からコーチを招聘し、オリエンテーリングの競技力を磨いていこうというのが次のステップになります。前年には、海外遠征で経験を積み、本番を迎えようというのが大まかなプランです。

Q：

陸上選手や山岳耐久レーサーなど、オリエンティア外にも目を向けています。小野会長も走れなければだめだと発言なさっているとか。強化プランの中で、オリエンティアは見捨てられたのでしょうか？

A：選手層を厚くします。

少なくとも走力面において、国際的なレベルにあることはスタートラインとして魅力があります。しかし、オリエンテーリングは走力だけではないことはオリエンティアのみならず自身がよくご存知のことと思います。どんなタレントを持っていても、少なくともこれからの2年間は、オリエン

テーリングの世界で精進していかなければ結果に結びつくものではありません。その過程において、立派なオリエンティアになっていくと考えています。その意味で、彼ら自身も「オリエンティア」なのです。

また、他競技において、トップレベルにいる選手はみなそれぞれに卓越した能力やノウハウを持っています。そうした選手と共にトレーニングをしていく中で、今のオリエンティアがそれらを吸収し、より一層ステップアップをしていくことが重要なのです。

今回のプランで他競技からオリエンターリングの世界に挑戦していただく事は、オリエンターリングの選手層が厚くなることすなわちオリエンターリングの普及に結びつきます。さらに、出身競技団体へのオリエンターリングのPRとなる点からも意義の大きいものだと考えています。

Q :

目標はリレー入賞ということですが、現時点では、まだ芳しい結果が出ていないように思えます。大丈夫なんでしょうか？

A : 諦めません

これまで、日本では、協会が中心となった組織的な強化システムが存在していませんでした。しかし、今回は地元開催を目前に控えており、協会はもちろん選手たちのモチベーションも盛り上がっています。いまからダメと決めつけるのではなく、当日までできるだけの努力をする事が、大切だと考えています。諦めないことだけが、今われわれにできる唯一のことなのだと思います。

Q :

オリエンターリングの世界において日本人が世界を制することはあると思っていますか。

A : 努力と発想で

同じ北欧優位のスポーツであるノルディック複合では、荻原健司がワールドカップやオリンピックを制しています。彼も最初のうちはライトバン一台にスキー道具を詰め込みヨーロッパを転戦したそうです。そして、V字ジャンプをいち早く取り入れ大成功を収めました。オリエンターリングの世界でも、長い歴史をもつ欧州勢に立ち向かうことは容易な事ではありません。しかし、卓越したタレントを持つ集団が、地道な努力を続け、さらに発想の転換があれば可能だと信じています。

Q :

これまでオリエンターリングは「みんなのスポーツ」を標榜してきました。一部のエリートに集中的にエネルギーを注ぐことには、反感もあると思いますが、この点どう思いますか？

A : もう一度脚光をあびましょう。

昭和40年代に「自然に親しむ新しいスポーツ」としてオリエンターリングが大成功を収めたことは、われわれの根底にも残っています。しかし、それから20年を経て、この概念はもはや「新しい」とはいえないものになってきました。またエリート競技選手と一般愛好者との関係も変化しています。

今、オリエンターリングが再度世間の注目を集めるためには、国際競争力を高めるのもひとつの方法だと思います。その数少ないチャンスともいえるのが2005年の地元での世界選手権です。そこでの好成績が、オリエンターリングの新たな普及の糸口となると確信しています。

Q :

最後に、このプランにオリエンティアとして何か協力できることはありますか？

A : サポーターがチカラをくれる

日本が世界選手権に参戦してから20年を越えています。その間の経験者はもちろん、海外レースの経験があるオリエンティアは相当数いると思います。選手はもちろん、コーチ・スタッフ・オフィシャル共に人材不足です。是非とも多くの方にご参加、ご協力を頂きたいと思っています。

また、昨年のサッカーのワールドカップにおいて日本と韓国の成績の差は何だったのでしょうか。専門的なことは分かりませんが、韓国の熱狂的なサポーターの力もひとつの要因ではないかと思っています。オリエンターリングは走っている選手を直接応援できるスポーツではありませんが、多くの日本のオリエンティアがいろいろな所で日本チームを応援していく事が、不可能を可能にする力になっていくのだと信じています。

(宮川：スコード)

(オリエンターリングマガジン)